

令和8年度第1回三重県文化審議会 議事概要

令和8年8月28日（金）

10時から12時まで

1 環境生活部長あいさつ

2 会長・副会長の選任

会長：山田委員

副会長：千種委員

3 諮問

資料1により諮問

4 議事

（1）「第2次三重県文化振興計画（仮称）」の策定について

（2）意見交換

資料2、3、4、5、6により事務局説明

[委員からの主な意見等]

（委員）

成果指標として県立文化施設の利用者数を示しているが、総合文化センターや美術館の休館が利用者数に影響を与えたことを踏まえると、休館がなかった場合に目標を達成できていたかどうかの分析が必要である。あるいは、事前に休館が予定されていたのであれば、それを見込んだ目標値を設定すべきである。

また、少子高齢化・人口減少が進む中で、子どもの人口減少は特に深刻な問題である。現在の三重県の18歳人口は約15,850人であるが、5年後には1,000人以上減少し、18年後には約8,800人になると見込まれる。子どもが文化に触れる機会をつくることはとても大事なことであり、利用者数の絶対数を目標とするだけでなく、どれだけの割合の子どもたちが文化活動に参加しているかという視点での評価が重要である。文化活動を支える人材の底上げを図るためにも、先を見据えた評価の在り方を検討しながら施策を考えていく必要がある。

（委員）

現行計画の期間は3年間であったが、次期計画は5年間となることを踏まえると、「検討する」とどまらず、具体的に「実施する」「取り組む」といった内容を計画に盛り込む必要がある。

子どもの体験格差については、文化志向の高い家庭の子どもが劇場のワークショップに参加する一方、機会の少ない子どもへのアプローチが不足している。公共ホールは税金を使って運営されているため、機会の少ない子どもにこそ文化体験の機会を届けるべきであり、学校現場へのアウトリーチが有効ではないか。体験を通じて、子どもたちができることが増えたり、感想を持つことが重要であると感じる。

四日市市では、令和8年10月から「こどもみらいクーポン事業」が実施される予定であり、学校で配付されたタブレットを活用してポイントを貯め、文化体験やスポーツ体験に使えるような取組が始まっ

ている。県の生涯学習センターも本物の文化体験ということで学校へのアウトリーチを行っていただいていると思うが、こうした体験格差の解消に向けた取組を、県としてもさらに広げていく必要がある。

若手アーティストや担い手の育成については、地域の文化協会が高齢化しており、若手が参入しにくい状況がある。コロナ禍を通じて、地域のアーティストが必ずしも文化協会に属しているわけではないことが明らかになった。文化協会に所属していない若手アーティストへの支援が不十分であり、助成金の充実が必要である。現状、県や市町の補助は1/2補助で上限が15万円から20万円程度にとどまっているが、岡田文化財団が50万円から100万円規模の支援を行っていることと比較しても、公的支援の充実が求められる。例えば、若手のスタートアップを3年間継続して支援するような仕組みが必要ではないか。こうした専門的な支援を担う組織として、アーツカウンシルの設置を次期計画に明確に盛り込んでほしい。「新たな支援策の推進」という表現では弱く、5年間の計画期間内に新機関を設置する旨を明記すべきである。検討や支援で5年経過してしまうと、いろいろなことが遅れてしまう。人口減少や財政難で閉鎖を考える劇場も出てくると思う。この5年間でどう手を打つか、非常に重要である。

また、中学校の部活動の地域移行についても、次期計画の中で支援する旨の文言を盛り込むべきである。

(委員)

今後の5年間は非常に重要な時期であり、名前や組織体制をどうするかという議論はあるが、アーツカウンシルのような組織の設置は特に重要な課題である。

骨子案を見ると、前回計画から変わっていない部分が多い。基本理念である「文化の力で心豊かに活力ある三重を実現」は変わらないとしても、三重県の将来の存続にかかわるという危機感や、より積極的・前向きなメッセージが必要である。現状の表現では、「文化で心豊かに」という従来型の文化行政の域を出ていないように受け取られかねない。文化分野以外の多くの人々が「文化は地域の存続にとって本当に重要なもの」と認識できるような計画にしてほしい。

先日、三重県を訪れた際、伊勢神宮は非常に素晴らしかった。一方、忍者で知られる滋賀県甲賀市も訪れたが、強力な文化資源を持ちながらも、町の雰囲気や観光の盛り上がりが資源の魅力に見合っていないと感じた。インバウンド対策に取り組む店舗も見受けられ、努力は感じられるものの、これほど強い資源を持つ地域としてはさらなる可能性があるのではないかと思った。こうした経験からも、文化の重要性を様々な人々に伝え、地域の活力につなげていくような計画であってほしいと感じている。

また、この3年間で他分野の部署との連携や市町への浸透がどこまで進んだのかも気になるところである。

(委員)

「三重県文化振興計画」は、文化を未来へつなぐための手段であるとともに、地域の活力を生み出す総合的な戦略でもありと考えている。3年間の成果を次の5年間につなげていただきたい。

事務局から説明もあったが、担い手不足は大きな課題であり、その解決策を県民にどう説明していくかが重要である。

現行計画はコロナ禍という前例のない状況の中で策定されたものであり、コロナ禍による文化活動の停滞という影響もあった。現在はその停滞が解消されつつあると思われるが、今後は大規模震災のリスクへの備えも重要な課題である。熊本地震をはじめ内陸型の地震が発生するなど、リスクが高まっている中で、文化活動をどのように県民とともに継承していくかは大きなテーマであり、次の5年間ではそうしたリスクへの手当ても含めた施策が必要である。さらに、デジタル活用の遅れへの対応や、SDGsへの貢献という観点も、次期計画において重要な視点として盛り込むべきである。

(委員)

文化ルートの構築数を指標としていることは良いと思うが、課題は構築したルートをどのように活用していくか、という点である。三重県には観光部があり、観光振興のアクションは観光部が担うことになるかもしれないが、文化振興課が推進する観光振興は、経済効果一辺倒ではなく、文化遺産などの本質的価値を大切にしながら地域と密着した形で展開できるという強みがある。他の会議に出席していると、文化を担当する課が観光について触れることはあっても、文化ルートにまで言及することは少ない中で、三重県文化振興課は観光振興に積極的なイメージがある。その強みを活かし、観光部とは異なる独自のカラーを持った観光振興を展開できると思う。

次期計画では、文化振興課らしい観光振興の方向性をきちんと文章化し、構築した文化ルートの活用も含めて、文化と観光の連携をより具体的に打ち出せるとよいと思う。

(委員)

前回の審議会において、3年間という短い計画期間を試行的なものとして位置づけることを提案させていただいた。この3年間は周年事業もあり、非常によく取り組んでいただいたと評価している。他の委員からも意見があったが、次の5年間に向けては、よりエッジをきかせた施策展開が求められる。

若い方の参画については、審議会委員の構成も含め、若い世代の声が届きにくい状況が続いている。パブリックコメントにおいて若年層に特化した意見募集を行うことや、今後設置される三重県文化振興計画評価・推進会議の委員に文化芸術活動に参加している若者を加えることを検討していただきたい。また、アンケート結果について年齢別のクロス集計を行い、若い世代の意見についてもお知らせいただきたい。アウトリーチ活動については、以前から地域格差の問題が指摘されており、美術館をはじめ各施設においてアウトリーチ活動が行われているが、まだまだ地域格差は解消されていないと感じている。地域格差を解消するための手段の一つとして、動画配信の活用が考えられる。有料配信も含め、文化をより広く届ける手段として動画配信を積極的に活用することができないか検討していただきたい。

(委員)

計画の取組状況として示されているのは県が実施した事業と成果・数値であるが、文化振興は県だけでは達成できない。市町、事業者、文化団体がそれぞれの立場で連携・協働することが不可欠であり、次期計画にはそうした主体の活動をどう引き出し、支えていくかを明確に盛り込んでほしい。

岡田文化財団がどれだけ尽力しても、三重県全体の文化振興に寄与できるのはほんの一部にすぎない。県が事業者や文化団体を牽引していく役割を果たしてほしいが、現状ではその部分が不足していると感じる。次期計画には、県が事業者や文化団体をどう引っ張っていくのかを明確に盛り込んでほしい。また、今回の骨子案を見ると現行計画からあまり変わっておらず、第二次計画で何をやろうとしているのかが見えてこない。文化に関わる団体にどのような活動を期待するのかという点についても、次期計画に明記してほしい。

アンケートについては、令和5年度と令和8年度の結果に大きな変化が見られないが、どのような結果が出れば文化振興の成果が上がっていると言えるのか、アンケートの目的と評価の基準を明確にしてほしい。

(委員)

亀山市もそうであるが、市が単独でいくら頑張っても、文化芸術を推進することには限界があり、様々な団体が連携し、それぞれの力が合わさって初めて新しいものが生まれるということを実感している。

アンケートでも多様な主体との連携の重要性が示されており、連携を強化することで、アンケートの上位3位に挙げられた課題の解決も加速できるのではないかと考える。県は市よりも大きな立場にあることから、市町との連携も含め、多様な主体との連携をさらに積極的に取り入れていただきたい。

施策の体系のところで、基本方針や基本施策は3年間で変わらないということはよくわかる。そうしたときに、3年間の課題がどう反映されるのかは、取組の方向性であったり、さらに、今後示していただけるその先で、課題に対応した取組が書き込まれると良いと思う。

(委員)

三重県障害者団体連合会は県から三重県障がい者芸術文化活動支援センターの運営事業を受託しており、その中で、三重県障がい者芸術文化祭を開催している。作品展では700点を超える応募があり、SNSや広報に加え、全ての障がい福祉事業所への案内を行うことで、これまで文化に触れる機会のなかった方からの応募も生まれている。積極的な親からは相談などもあるが、興味が無い方に発信していくということも大事であると感じている。

近年は、演劇・音楽・ダンスなどの身体表現による活動が広がっている。昨年は熊野市での海外講師を招いたダンスワークショップを開催したところ、非常に高い評価を得ており、数値では表れない豊かさを実感している。一人ひとりに寄り添った活動の重要性を踏まえ、次期計画においても数値目標だけでなく、そうした質的な成果を評価できる仕組みがあると良いと思う。

また、令和6年4月の障害者差別解消法改正により、事業者による合理的配慮の提供が義務化されたことを踏まえ、現行計画の「県立文化施設のバリアフリー化」という表現を「県立文化施設等」とするなど、県立以外の文化施設にも働きかけが及ぶようになると良いと思う。

(委員)

アンケートの「年齢や障がいにかかわらず文化・芸術に関する活動を行える環境の整備」という項目について、文化芸術活動に限らず、あらゆる活動を行う方や団体にとって、最も困っていることのひとつが練習する場所の確保である。環境整備の中で最も重要な要素の一つは、活動できる場所をいかに提供していくか、という点ではないかと考えている。県以外の施設も含めた活動の場の確保について、より具体的に踏み込んだ内容を計画に盛り込んでほしい。その具体的な方策の一つとして、廃校となった学校施設の活用が考えられる。現在、あらゆるレベルの学校で統廃合が進んでおり、廃校となった施設が各地に存在している。こうした施設を文化芸術活動の拠点として有効活用することができれば、活動の場の不足という課題の解消につながるのではないかと。ぜひ次期計画に盛り込んでいただき、活動する方々に寄り添った計画にしていきたい。

(委員)

自身の経験として、若い頃に三重オペラ協会において自作のオペラを5、6曲演奏していただくなど、非常に恵まれた環境の中で活動することができた。しかし、現在は人口減少などの影響もあり、当時のような活動はなかなか難しくなっている。

東京では、中央区の小中学校において学年単位で劇団四季の「ライオンキング」を鑑賞するなど、学校を通じた文化体験の機会が整っている。一方で、音楽会などの文化イベントは入場料がかかるものも多く、経済格差によって文化体験の機会に差が生じている現実がある。

小学校へのボランティア活動として音楽の授業を行い、いくつかのフレーズで作曲を体験させたり、リズムで作曲させたりする取組を行った。その中で、普段は教室に入ることが難しい子どもが、廊下から音楽の授業の様子をじっと聞いていて、最終的に参加してくれたという経験もある。担任の先生も非

常に喜ばれ、文化で人を育てることにつながったと実感している。

岡田文化財団などの助成団体が、個人や文化協会だけでなく、学校へのアウトリーチ活動を行う人材へも支援を行うようなシステムがあると、より身近なところから文化で人を育てることができるのではないかと考える。

YouTube で三重県の文化・観光資源を PR する動画コンテンツを目にしたが、伊勢志摩の海女さんなどを取り上げた非常に印象的な内容であった。財政的な課題はあると思うが、こうした動画コンテンツを継続的に発信していくことは、三重県のイメージアップや文化・観光資源の PR に大きく貢献するのではないかと感じている。

(委員)

基本的に申し上げたいことは、先の委員の皆様がおっしゃったことと重なる部分が多いが、やはり次期計画が5年間となることを踏まえ、その5年間で何をするのかを明確にして進んでいただきたい。課題を具体的に解きほぐし、様々な施策や事業を推進していくためには、アーツカウンシルのような組織・機能が必要ではないかと考える。本日、各委員のご意見を伺い、県内各地でさまざまな活動を行っている方々がいて、非常に効果的に動いている部分があることを改めて感じた。そうした活動を上手につないでいく役割を担う存在が必要であり、アーツカウンシルにその機能を担ってもらえないかと考える。

計画の内容についても、今回は変えた方が良いのではないかと。全てを変える必要はないと思うが、この5年間でこれを実施するということを明確に示すとともに、5年間の終わりにどういう状態を目指すのかを記載する方法はどうかと考える。

また、県が計画を作ると県がすることを書くという形になりがちであるが、文化振興は県だけではできないということは以前から認識されているはずである。「三重県文化白書」のようなものがあると良いのではないかと感じている。

さらに、少子高齢化は日本全国で進んでいる問題であり、様々な分野で担い手不足が深刻化している。担い手を育成し継続していくことはもちろん重要であるが、どう考えても人口が大幅に増加することは見込めない現実がある。そうした状況においては、縮小していく文化をマイナスとしてとらえるのではなく、積極的に記録・アーカイブ化していくことも重要な視点ではないかと考える。現在、県有のものについてはデジタルアーカイブ化の取組が進んでいると思うが、それ以外のものについても記録が必要なものがあるのではないかと。この5年間でそうした取組を始めていただければと思う。

(委員)

この3年間は、諮問理由にある「文化の振興と文化により生み出される価値の活用に関する施策」という言葉につきると感じている。文化を「守る」だけでなく「活用する」ことの重要性を広く県民に知っていただくための期間であったと捉えている。次期計画の5年間では、基本目標や基本方針は変えずとも、取組の方向性においてももう少し積極的な方向性を示していただければと思う。

先日、伊勢神宮の式年遷宮に向けたお木曳行事に参加した。少子高齢化により各奉曳団の団員や団費が減少する中、各奉曳団が連携する「令和のお木曳」として開催され、コロナ禍で中止となっていた二見のしめ縄引きの7年ぶりの復活にもつながった。伝統行事を核とした地域の連携の広がりを目の当たりにし、こうした伝統行事の力を文化振興や地域づくり・観光振興につなげていく可能性を改めて感じた。

私が住んでいる地域で小学校の統廃合があり、その際に、校歌を作らせていただいた。地域のことを盛り込んだ校歌にしたので、校歌を通じて文化を伝えることができるということを実感した。

(委員)

県立文化施設はよく頑張っているが、その取組が県全体に浸透・連携していくことが大きな課題である。三重県は南北に長く、地域ごとに文化的な特性もある中で、各市町の文化センターの担当者とながり、連携しながら県全体の文化振興を進める仕組みが必要である。

人材育成については、アーティストの育成だけでなく、文化をマネジメントする人材やファシリテートする人材の育成が特に重要である。アーティストだけがいても文化は広がらず、それをつなぐ人材が不可欠であるが、そうした人材がまだまだ少なく、育成できていないと思っている。その点について、次期計画にぜひ盛り込んでいただきたい。

(事務局)

市町や文化芸術団体との連携、文化をマネジメントする人材やファシリテートする人材の育成、アーツカウンシル機能を有する組織の設置など、次期計画に盛り込む内容として多数のご意見をいただいた。今回の骨子案において、基本方針や基本施策は「三重県文化振興条例」を基にして定めているということもあり、継続する方向で考えているが、取組の方向性については委員の皆様がおっしゃるとおり、しっかり見直しをさせていただいて、次回の審議会でご意見をいただきたいと考えている。